

新約聖書 使徒言行録 4章 32節—35節（新共同訳）

³²信じた人々の群れは心も思いも一つにし、一人として持ち物を自分のものと言う者はなく、すべてを共有していた。³³使徒たちは、大いなる力をもって主イエスの復活を証しし、皆、人々から非常に好意を持たれていた。³⁴信者の中には、一人も貧しい人がいなかった。土地や家を持っている人が皆、それを売っては代金を持ち寄り、³⁵使徒たちの足もとに置き、その金は必要に応じて、おのおのに分配されたからである。

新約聖書 ヨハネの手紙 一 1章 1節—2章 2節（新共同訳）

¹初めからあったもの、わたしたちが聞いたもの、目で見えたもの、よく見て、手で触れたものを伝えます。すなわち、命の言について。——²この命は現れました。御父と共にあったが、わたしたちに現れたこの永遠の命を、わたしたちは見て、あなたがたに証しし、伝えるのです。——³わたしたちが見、また聞いたことを、あなたがたにも伝えるのは、あなたがたもわたしたちとの交わりを持つようになるためです。わたしたちの交わりは、御父と御子イエス・キリストとの交わりです。⁴わたしたちがこれらのことを書くのは、わたしたちの喜びが満ちあふれるようになるためです。

⁵わたしたちがイエスから既に聞いていて、あなたがたに伝える知らせとは、神は光であり、神には闇が全くないということです。⁶わたしたちが、神との交わりを持っていると言いながら、闇の中を歩むなら、それはうそをついてるのであり、真理を行ってはいません。⁷しかし、神が光の中におられるように、わたしたちが光の中を歩むなら、互いに交わりを持ち、御子イエスの血によってあらゆる罪から清められます。⁸自分に罪がないと言うなら、自らを欺いており、真理はわたしたちの内にありません。⁹自分の罪を公に言い表すなら、神は真実で正しい方ですから、罪を赦し、あらゆる不義からわたしたちを清めてくださいます。¹⁰罪を犯したことがないと言うなら、それは神を偽り者とするのであり、神の言葉はわたしたちの内にありません。

¹わたしの子たちよ、これらのことを書くのは、あなたがたが罪を犯さないようになるためです。たとえ罪を犯しても、御父のもとに弁護者、正しい方、イエス・キリストがおられます。²この方こそ、わたしたちの罪、いや、わたしたちの罪ばかりでなく、全世界の罪を償ういけにえです。

新約聖書 ヨハネによる福音書 20章 19節—31節（新共同訳）

¹⁹その日、すなわち週の初めの日の夕方、弟子たちはユダヤ人を恐れて、自分たちのいる家の戸に鍵をかけていた。そこへ、イエスが来て真ん中に立ち、「あなたがたに平和があるように」と言われた。²⁰そう言って、手とわき腹とお見せになった。弟子たちは、主を見て喜んだ。²¹イエスは重ねて言われた。「あなたがたに平和があるように。父がわたしをお遣わしになったように、わたしもあなたがたを遣わす。」²²そう言ってから、彼らに息を吹きかけて言われた。「聖霊を受けなさい。²³だれの罪でも、あなたがたが赦せば、その罪は赦される。だれの罪でも、あなたがたが赦さなければ、赦されないまま残る。」

²⁴十二人の一人でディディモと呼ばれるトマスは、イエスが来られたとき、彼らと一緒にいなかった。²⁵そこで、ほかの弟子たちが、「わたしたちは主を見た」と言うと、トマスは言った。「あの方の手に釘の跡を見、この指を釘跡に入れてみなければ、また、この手をそのわき腹に入れてみなければ、わたし

は決して信じない。」²⁶さて八日の後、弟子たちはまた家の中におり、トマスも一緒にいた。戸にはみな鍵がかけてあったのに、イエスが来て真ん中に立ち、「あなたがたに平和があるように」と言われた。²⁷それから、トマスに言われた。「あなたの指をここに当てて、わたしの手を見なさい。また、あなたの手を伸ばし、わたしのわき腹に入れなさい。信じない者ではなく、信じる者になりなさい。」²⁸トマスは答えて、「わたしの主、わたしの神よ」と言った。²⁹イエスはトマスに言われた。「わたしを見たから信じたのか。見ないのに信じる人は、幸いである。」

³⁰このほかにも、イエスは弟子たちの前で、多くのしるしをなさったが、それはこの書物に書かれていない。³¹これらのことが書かれたのは、あなたがたが、イエスは神の子メシアであると信じるためであり、また、信じてイエスの名により命を受けるためである。

説教「神の息」

教会讃美歌 294 番 「恵みふかきみ声もて」 1-3 節、
95 番 「よみがえりの日」 1-3 節、
375 番 「神の息よ」 1,2,4 節、
253 番 「カルバリの十字架に」 1-3 節、
192 番 「主イエスよ思いと」

本日の福音書は、「その日、すなわち週の初めの日の夕方、弟子たちはユダヤ人を恐れて、自分たちのいる家の戸に鍵をかけていた」から始まります。イエスの生前、ずっとイエスに従い仕えていたマグダラのマリアが、復活したイエスと出会った日曜の夕方、弟子たちはエルサレムのとある家に集まっていた。イエスを十字架につけたユダヤ人たちが、イエスの弟子である自分たちにもどんな危害を加えてくるか分からない状況の中、彼らは恐怖に怯え、一つの家に閉じこもり、中から鍵をかけて潜んでいました。

そこへ、死んだはずのイエスが来て、弟子たちの真ん中に立ち、「あなたがたに平和があるように」と言ったのです。戸が閉じていたにもかかわらずイエスが入ってきたということに、復活したイエスが時間と空間を超越した存在であることが示されています。そしてここでは、イエスが閉じた戸を通過できる超越的な体をもっていたということよりも、あの死んだイエスが体ごと「来られた」ことの方がより強調されています。復活の主イエスには、十字架で傷つけられた跡があります。古来 多くある復活のキリスト像には必ず傷跡があります。復活のキリストは、空想ではなく、具体的な傷跡を伴うのです。

「あなたがたに平和があるように」という言葉ですが、これは、当時の社会では「こんにちは」というような、ごく普通の挨拶の言葉でした。しかし、この場面でイエスがこの言葉を繰り返し口にする場合に、これを単に習慣的な挨拶の言葉として受け取ることはできません。このような状況の中にある弟子たちに対して、どれほど深い意味のある言葉としてこの言葉が語られたかを思われます。

この「あなたがたに平和があるように」という言葉は、文語訳聖書では「平安なんぢらにあれ」と訳されていますが、実は原語では「平安汝らに」とあるだけです。ですから動詞を補って訳せば「平安汝らにあれ」—「あなたがたに平

和があるように」とも訳せますが、「平安汝らにあり」－「あなたがたに平和があります」とも訳せます。

しかしボンヘッファーという神学者は、ここでのイエスの言葉は、「平安汝らにあり」と言い切った表現で捉えるべきだと言っています。やがて平安が来るであろう、平安が来るように、ではなくて、平安そのものであるイエスがここに在ることによって、平安は現にそこにあり、私たちは平安と一体なのです。

イエスの十字架の受難の時、弟子たちはイエスを見捨てて逃げ出し、ペトロもイエスのことを「わたしはその人を知らない」と三度、否定しました。そして今も弟子たちは、ユダヤ人への恐れから、戸を固く閉ざして、戦々恐々としています。しかし、復活したイエスは、弟子たちの裏切りや不信仰を咎めようとはしません。イエスは、戸に鍵をかけられた家の中に入ってきて、何事もなかったかのように「あなたがたに平和があるように」と言ったのです。

「手とわき腹とをお見せになった」とは、十字架上での釘と槍による傷跡を、弟子たちに見せたということです。そのことによって、弟子たちは、今、自分たちの前に立っている甦りの主が、自分たちのために十字架で苦難を受けられた、あのイエスであることを確認します。イエスが弟子たちに語った「平安汝らにあり」という言葉は、その言葉が十字架の苦難の主イエスの言葉であるからこそ、真実の平安に満ちた言葉となるのです。

「弟子たちは、主を見て喜んだ」とあります。その喜びは復活の、死が克服された喜びであり、愛を受ける喜びです。別れの悲しみは、再会の喜びに変わったのです。

そしてイエスは、彼らに息を吹きかけ「聖霊を受けなさい」と言われました。ここから思い出されるのは、あの創世記に記された、天地創造の時に、神が人間を造られたことについての記述です。

天地創造のときに、神は土の塵で人を形作り、その鼻に命の息を吹き入れられ、こうして人は生きる者となりました。弟子たちもまた、イエスに息を吹き入れられ、聖霊を与えられることによって、新しい人間として生まれ、聖霊の言葉を語る口を与えられ、世に派遣されるのです。

「だれの罪でもあなたがたが赦せば、その罪は赦される。だれの罪でも、あなたがたが赦さなければ、赦されないまま残る」。

聖霊による新しい創造は、罪の赦しと直結しています。この新たなる神の創造によって、世に罪の赦しが広がるのです。

十二弟子の一人であるトマスは、復活したイエスをはじめに弟子たちのもとへ来た時、彼らと一緒にいませんでした。トマスは、自分が不在の時に他の弟子たちのもとにイエスが現れたと言われても信じませんでした。トマスの不信は、「あの方の手に釘の跡を見、この指を釘跡に入れてみなければ、また、この手をそのわき腹に入れてみなければ、わたしは決して信じない」というあからさまな言い方にも表されています。

トマスは、頑固で疑い深い人物だったようです。しかしそのトマスも、それから一週間後の日曜日に、復活のイエスと対面して、ただちに「わたしの主、わたしの神よ」という信仰告白をします。トマスにとって、それはほとぼり出た言葉でした。この言葉は、トマスの心の叫びのように聞こえ、衝撃とショックを受けたもののような感じを受けます。疑いが大きかっただけ、驚きも大きかったのでしょう。

「わたしを見たから信じたのか。見ないのに信じる人は、幸いである」

イエスのこの言葉は、私たちが、日々の生活の中に神がおられるしるし、すなわち神の臨在のしるしに目を開き、私たちのうちに今も生き続ける復活のイエスの力を信じることを求めています。

復活したイエスとの再会は、弟子たちにとって「ゆるし」の体験でもありました。「ゆるし」とは、「和解、関係回復」の出来事です。弟子たちは、イエスを見捨てて逃げてしまいました。しかし復活したイエスは、弟子たちを責めるのではなく、彼らを愛し抜き、再び弟子として受け入れたのです。

私たちも、何もかもが嫌になり、すべてを遮断し、しっかりと鍵をかけて自分の殻に閉じこもりたくなる時があるかもしれません。

しかし私たちが、どれだけ強固に心の扉の鍵をかけたつもりでも、イエスは瞬く間にその扉をすり抜けて、私たちの前に立ってくれているのです。

「だれの罪でも、あなたがたが赦せば、その罪は赦される。だれの罪でも、あなたがたが赦さなければ、赦されないまま残る」。

この言葉は、人を赦したり赦さなかったりする権威を持つことができるという意味合いではなく、ただ「人をゆるせ」というイエスの強力なメッセージなのです。

「ゆるし」の根底には、愛があります。

そして、キリストに息を吹きかけられた者は、愛と聖霊によって人を赦す力が与えられるのです。

私たちも、人を、そして自分自身を赦しましょう。

イエスは弟子たちに「平安汝らに」と言いました。

「ゆるし」のあるところに、心の平安があります。

憐れみ深く慈愛に満ちた、主イエス・キリストの御名を通して祈りましょう。